

「タジキスタン野菜栽培技術研修指導」を終えて

国際協力事業団 筑波国際センター（以下、TBIC）では途上国からの研修員に対し稲作栽培、農業機械設計、灌漑排水、野菜栽培に関する直営研修コースを実施している。今回、当社はこの直営コースの一つ“タジキスタン共和国 国別特設「野菜栽培」コース”を受託し、8月半ばから11月末の期間に研修指導業務を実施した。ここでは、講義、実験実習、実践現場の見学を通じて日本の野菜栽培及び普及の現状を紹介し理論と普及の知識を提供することによって、タジキスタン国の農業振興に寄与する人材を育成することがコースの目的である。また、その到達目標としては、日本の野菜生産の現状を理解し、栽培技術及び植物生理を習得すると共に、技術普及システムと手法を習得することである。

当社は研修指導員の配置と関係事務を受託し、カリキュラムの計画・実施、それに係る講師や見学先との連絡調整、実験・実習の計画・準備及び指導を行った。コースには JICA 担当職員及び研修指導者、JICE 研修監理員が配置され、TBIC に於いて実施された。研修の全てに係わる研修指導員としては、私と農林水産省 OB で農学博士である 大久保隆弘 氏のご協力を得て 2 名で指導にあたる体制を組んだ。

技術指導にあたっては「理論と実践、現場に学ぶ」を基本方針に研修を進めた。研修計画の立案に際し、研修員自らが栽培の一連の流れである播種、圃場準備、元肥施与、苗の移植、栽培管理、及び収量調査という栽培技術を習得できるよう設定した。ただ、受け入れ期間の制約上、各工程を平行して進めなければならず、理論と実際をいかにして理解し習得してもらうかが工夫のしどころとなった。そして研修員が作業を傍観するのではなく、実際に栽培を行い、体で技術の習得をするように進めた。また、研修が一方通行の情報伝達にならないように、帰国後もお互いに技術検討ができる関係を構築することにも努めた。

研修員は野菜栽培研修に先立ち、来日後約 2 週間は、滞在中の日本での必要知識や社会制度等の一般オリエンテーションと研修の目的・日程・内容等のコースオリエンテーション、及び日常生活に必要な日本語集中講義を受けた。また、TBIC では夜間に日本語講座やコンピューターに関する講座を実施しており、希望者は自由に履修できる体制となっている。その他、夜間や週末に日本文化紹介パーティなどの厚生行事が催され、各国からの研修員と知り合う機会などが提供されている。

当初、研修員からは常に自国の技術と比較した質問が多かったが、研修が進むに従って野菜栽培技術の根幹に係る質問を指導員のみならず見学先の農家に対しても積極的に行い、与えられた機会を大切にしようとしていた。チームワークも非常に良く、実習や調査、そしてレポート発表に熱心に取り組み、研修コースの意義を十分に理解したと思われる。3ヶ月半の研修を終え帰国バスを待っている間に、研究員達と別れがたい感情が湧き出し、研修事業に携わる「喜び」と「悲しみ」を感じるとともに、今後も研修員たちと交流を続けていきたいと改めて感じている。

（筑波にて、長谷川）



バレイショ追肥試験



練床育苗実習